

第三章 定年以後

第1節 2009年まで

1. 作曲活動

平成13年3月定年により埼玉県公立学校教職員を退職した。

埼玉県立春日部高校時代の昭和59(1984)年の中頃、歌劇「なよたけ」の手始めと言ってもよい1曲「かぐやを愛し始めると」を作曲した。「なよたけ」は加藤道夫氏の戯曲である。杉戸農業高校と春日部高校時代の同僚であった、宮本和男先生の紹介で、この戯曲の存在を教えられた。平成12(2000)年5月に歌劇「なよたけ」全幕手書きによるピアノ・スコアを完成し製本した。公立学校教職員を定年退職する前年である。平成17(2005)年1月11日に歌劇「なよたけ」第三幕第1場「竹林の小さな空き地」第2場「小高い丘陵・昇天」を第9回アンデパンダンすみだトリフォニーホールで行い、「なよたけ」は一応の完結をしたと考えている。手書きスコア完成から5年の歳月が経過しているが、この間にPCソフトを使った楽譜によって歌劇「なよたけ」全幕を改訂完結した。

定年の頃は管弦楽による歌劇「なよたけ」全幕公演を考えていた。そのためには莫大な資金が必要である。これを実現するために枇杷を使った製品を開発して売り出そうと考えた。枇杷はいろいろな面でよく効く。しかし、なぜ効くのかその根拠をつきとめる必要がある。客観的データが必要になるだろう。そのためには薬の勉強をしなければいけない。大学への受験を考えたが、高校卒業から40年以上も経って、高校時代までの学習内容をみな忘れた今になって、一般教養科目をこれから勉強することは不可能に近かった。



42年間のご無沙汰である。平成13年4月、AO入試で受験できる学校法人日野学園日本医歯薬専門学校薬業科に入学した。在学中は若者達と一緒に勉強できて楽しく、面白く、張り合いがあった。肝心の枇杷については、日本薬局方に掲載されていないことが判明した。薬事法も勉強して、日本薬局方に掲載されていないければ、日本国内では「薬」とであると認められておらず販売することができない。それでは成分分析しようかと、薬科大学を卒業した先生から日本医歯薬専門学校にある成分分析機の操作方法を質問した。成分分析機は、枇杷の化学式がわからないと分析できないという。枇杷の化学式すらわからないのでは、単に成分分析機を使っただけでは有効成分は突き止められない。専門家に依頼して成分分析と同時に有効成分を突き止めるには、莫大な資金が必要になってくる。そんなお金を持っていたら、学校に改めて入るような遠回りをしないで、歌劇「なよたけ」の管弦楽による公演ができるのだ。



これで枇杷は「薬」として売り出すことはできない。化粧品として売り出すことも、同様の理由から薬事法の関係でできない。仕方がないから、家でできる範囲で製品開発をやってみようかと考えて、我が家の増築を行った。

庭の植木の葉や根を中心にして焼酎に漬けた健康酒、1枇杷の実、2姫笹、3竜の髭、4またたび、5銀杏の葉、6柿の葉、7カリンの実、8松の葉、9さまざまな木の実を漬けた健康酒の9種類を収納し、かつ製品開発のスペース確保のために、物置を取り壊して六畳間を増築した。また勉強部屋を確保するために二階に書斎を造った。だから実行に移せばできるはずだが、やっていない。日本医歯薬専門学校を卒業する平成15年3月に校長先生から薬業科の担任を依頼された。一年間勤めたが通勤が大変で、また自分の時間、勉強や作曲の時間が一切取れないので、さいたま市大宮区にある埼玉福祉専門学校に非常勤講師として勤務するように職場替えをしてもらった。

だが今も枇杷の研究はまったく進んでいない。なぜ進めないのだろうと考えてはいるのだ。①枇杷の容器の開発(小さな容器と大きな容器)。②インターネットのホームページの開設。③「枇杷の効用」をうたうことをしないで、どのように宣伝するのか。そんなこんなで今はストップしたままだ。それで、武者小路実篤作「その妹」の歌劇化に取り組み、第二幕第1場まで作曲が完成した。作曲だけは、順調に進んでいる。

2. 平成13年3月以後の作品

杉戸高校には呑気楽会^{のきらくかい}という気楽に飲み、且つ語らう会がある。現役時代も定年以後も呑気楽会を

通して、杉戸高校の現役の先生方と交友を深めている。その呑気楽会の交友から生まれた曲が何曲かある。「フーガ」と「シャコンヌ」平成16(2004)年1月31日作曲

平成15(2003)年1月23日(金)は、恒例の呑気楽会当日であった。会場を聞いていなかったのので、問い合わせるために杉戸高校に勤務する倉持氏に電話を入れた。待たされてしばらくの後、今朝ご逝去されたことを知らされる。友を失った空しさと寂しさが時間の経過とともに迫ってくる。帰途にテーマが浮かび、翌24日に作曲が完成した。1週間かけてシンセサイザーによるオーケストレーションを行う。「フーガ」=教会の鐘に導かれて、オルガンによる前奏とテーマが導入される。空しさと寂しさに包まれて心の赴くままにつづった自由なフーガである。



「シャコンヌ」=シャコンヌとは一つのテーマが何回か繰り返される中、他の声部がバリエーションされる古い形の変奏曲である。友を失った虚無感が固定観念となってテーマで表現されて曲全体を支配する。中間部は在りし日の倉持氏の人柄を偲ぶ。

「雄国沼」2004年8月26日～27日

2004年8月26日～27日に県立杉戸高校の先生方とともに福島県にある熱塩温泉にドライブした。晩に地酒の「会州一」と「宮泉」を山菜料理を肴にして味わい、翌日北方ラーメンを食べて雄国沼にドライブした。雄国沼は磐梯国立公園の南東部、磐梯山・吾妻山・安達太良山の西側、猪苗代湖・五色沼・檜原湖付近にある小さな沼である。雄国山・磐梯山を背景にした雄国沼は周囲に湿原が広がり、木道がよく整備されていて長閑で美しい沼であった。熱塩温泉から喜多方市をぬけて山道に入る。山道に入る手前には広大な棚田が広がる。その風景は関東平野の田園地帯では、今はもう見るのできない、見渡すかぎりの稲穂の広がりがあった。普通車1台ががやっと通れる位の道路を登り詰めて行くと、雲が目の高さになり、眼下には先程の一面の稲穂広がる。登り詰めた峠の向かい側に雄国沼があった。途中の眼下の広がりも見事だったが、雄国沼の眺望は絶景である。紺碧の空と夏の終わりを告げる雲、雄国山と磐梯山、雄国沼の瑞々しさ、湿原の広がり的美しさは、ただただ感動をもって眺めるばかりであった。よく整備された湿原に通じる道を下って木道を歩く。数々の高山植物の中の浅い水溜まりに小さな魚が泳ぐ。空と山々と沼と湿原、絶対的な静寂の世界に浸って心が洗い流されていく。バスが入れない道幅と磐梯山や猪苗代湖の影に隠れた小さな雄国沼には、ほとんど手がつけられていない澄み切った自然があった。

「袋田の滝」平成17(2005)年3月9日から10日に杉戸高校第3回呑気楽会旅行会で6名の先生方とともに茨城県大子町の豊年満作というホテルまでドライブした。晩に水戸の地酒「一品」を夕食料理を肴にして味わい、部屋で大子町の「菊盛」をジャスコで買った「つまみ」お肴に遅くまで飲む。翌日の朝、袋田の滝を見学した。日本三名瀑に数えられる袋田の滝は、高さ120m、巾73mの大きさを誇り、大岸壁を四段に流れることから、別名「四度の滝」とも呼ばれる。西行法師が「四季に一度ずつ来てみなければ本当の良さはわからない」と絶賛したことから「四度の滝」と呼ばれるようになったとも言われる。「袋田の滝トンネル」の276mを、水しぶきの音を聞きながら5分ほど進むと突然に、壮大な滝が正面に現れる。四段の岸壁を流れる滝の雄大さにしばらく圧倒されるが、徐々に白糸を引くようになめらかに流れる水の情景と日本的風情に惹かれてくる。急流や威圧するような怒濤のうねりはどこにもない。あるのは木々とともに織りなす、どこまでも静かな滝の姿である。眺めるほどに風情を感じる日本の名瀑であった。帰路は、トンネルを左に出て吊り橋を渡る。しばらく歩くと滝が山々の風景にとけ込んで見えた。10時に大子町を出発。ひたちなか市と合併した那珂湊にある生鮮市場で昼食の海鮮丼を食べる。午後には水戸偕楽園を見学する。3000本の梅をはじめ、松・竹・大きな桜が配置された庭は優雅であった。

主要作品

歌劇「なよたけ」P C浄書全幕改訂版ピアノ・スコア完成(2002.1.12)、歌曲「青春レシピ」山中茉莉作詞(2002.9.24第35回詩と音楽の会初演)、「シンメトリア」ーヴァイオリンとチェロのためのー(第21回蒼初演2002.10.10)、歌劇「なよたけ」第二幕「葵の祭・都大路に一廓」(前半)改訂版初演(2002.12.6)、「シンメトリア」ー管弦楽のためのー作曲(2002.12.31)、ピアノのための三章(神秘・歌・波)作曲(2003.1.29葵の会初演)、歌曲「羽衣幻想」坂内のぶ子作詞(2003.9.26第36回詩と音楽の

会初演)、歌劇「なよたけ」第二幕「葵の祭・都大路に一廓」(後半)(2003.12.4 改訂版初演)、歌曲「あやとり」坂内のぶ子作詞(2004.9.29 第 37 回詩と音楽の会初演)、「シンメトリア」一木管 5 重奏のための一(2004.12.10 第 22 回蒼初演)、歌劇「なよたけ」第三幕第 1 場「竹林の小さな空き地」第 2 場「小高い丘陵・昇天」(2005.1.11 初演)、日本来古謡によるピアノソナタ完成(2005.5.31)、日本民謡による幻想曲完成(2005.6.30)、歌曲「水の上の空の上」印南長子詞(2005.9.21 第 38 回詩と音楽の会初演)、「シンメトリア」一弦楽 5 重奏のための一(2005.12.7 第 23 回蒼初演)。

3. 母の 7 回忌法要

母は平成 12 年 11 月に老衰のために死去した。平成 17 年 11 月 13 日(日)10 時、母の 7 回忌法要で秩父に帰る。久しぶりに 5 人の姉兄弟が顔を合わせた。一番上の姉賀子は 8 歳上だから 73 歳になる。旦那の升八さんは眼が悪く少し入院などしたそうだが、見たところ元気そうだ。息子の長史夫婦も幼子連れてきていた。すぐ上の姉廸代は若い頃胃潰瘍の手術をしたので、肝炎にかかり今はインターフェロンのお世話になっている。旦那の富司さんは歯肉癌でつい先頃亡くなった。娘の祥代はすでに 40 歳である。一度結婚したが旦那になった人がホモで、一度も身体に触れられないまま離婚した。もう結婚はこりごりだそうである。長兄章雄はつい先頃食道癌の手術をした。定期検診で初期の癌が発見されて命を取り止めたのだ。奥さんは元気にしている。この日は長男美也雄は来なかった。次男の美樹雄夫婦が来ていた。弟久雄は廸代と同じく若い頃胃潰瘍の手術をしたので、インターフェロンのお世話になっており、頭が薄くなって大分年寄りに見えるようになった。奥さんの幸子さんは乳癌の手術をしたが、初期だったので大分元気になった。長女の志貴子が一緒に来ていた。まだ独身である。次女真木子夫婦は子供が生まれて、まだ首が据わってないので連れてこられず欠席した。我が家は時子・静華・貴史、私を含めて 4 人で出席した。小鹿野の鳳林寺で法要をして、小鹿野町泉田のお墓をお参りし、羊山公園にあるいつものお食事どころで昼食会をやって帰ってきた。



時子・廸代・賀子と私(H.14.8)

4. 作曲活動

4. 作曲活動

ここで私が作曲活動を進めてくる上での拠り所としてきたグループについて入会頃にさかのぼってのべてみたい。

(1) 土肥泰先生と葵の会

土肥泰先生のご教示

杉戸農業高校に転勤した年の葵の会定期演奏会以後に土肥先生に弟子入りした。葵の会に入会したのは昭和 43 年第 4 回葵の会定期演奏会(1968.6.22)に親友小高秀一君のピアノ伴奏で出演した時である。小高君は川越出身で長年川越高校に勤務し、合唱団「秀」を率いて音楽活動を続けている朋友でもある。土肥先生には埼玉大学時代に和声学・対位法・作曲法を学び、卒業後にピアノ・ソナタ第 1 番「景觀」全楽章(1968.3.27)をもって入門した。先生が 70 歳でご逝去されるまで具体的作風の確立の上で、多大なご教示をいただいた。



土肥泰先生(H9 葵の会にて)

土肥先生にどのようなご指導を頂いたかを作品ごとに述べてみる。

①ピアノ・ソナタ第 1 番「景觀」全楽章(1968.3.27 第 5 回葵の会初演)＝この和音は誰かに教えてもらったのか。自分で見つけたのならば大変に良いことだ。冒頭は同一和音で何小節も動くのは変化に欠けるから、別種の和音を挿入するべきだ。第二楽章テーマの中間部を ABA にする。

②ピアノ・ソナタ第 2 番第 1 楽章(1969.11.7 未完第 7 回葵の会初演)＝第二主題が実に美しい。景觀とともに左手が伴奏ばかりだから左手にオクターブでテーマをもたせる。

③ピアノ組曲「十二支」(1976.1.15 全国学芸コンクール社会人の部作曲部門第二席)＝その年の干支を作曲して見てもらった。「動物の印象をずばり楽想にしなさい。印象が薄い動物は、作曲者にはそう思っても聴く人にはそう感じないかも知れないではないか」ともおっしゃられた。曲毎に私が足りないと感じていることは必ずその部分を指摘された。しっかりと書き込んで、これでよしと思って見

て頂くと、褒められて有頂天になった。土肥先生は絶対音感をお持ちで、楽譜を見ているだけで、すべて曲が分かるようであった。「全体的にソナタ形式の展開部のようだ」。「巳」は曲を通して同じ質感で作られているから、自分の作風を持てたのだろう。「子」の細かな動きは、すべて装飾音にしてはどうか。「景観」と「十二支」で、徹底して作曲というものの示唆を頂いたような気がしている。

④弦楽四重奏曲第1番(1977.1.15 全国学芸コンクール社会人の部作曲部門第一席文部大臣奨励賞作品)＝バルトークの弦楽カルテットをすべて研究することをアドバイスされた。バルトークが自分のシステムをもっているというよりも、天才的才能の煌めきや楽想のすばやい転換が非常に目立った。チャイコフスキーやベルリオーズを共感を持ってスコア・リーディングしたときとは別ものの感じがした。心からの共感は得られない。才能ばかりが目立って、ついていけない印象を持った。独自の音階と四度和声が目についた。音階は、例えば C D E F G A H の後半が Ges As B H になっている。つまり C D E F Ges As B H の 8 音音階になっているわけだ。多くの現代音楽作曲家が音階を持てなかった中で、バルトークの音階は注目に値するものであった。このことは後の私の作曲法の確立に大きな示唆となったことも、事実である。チャイコフスキーの二管編成の管弦楽法は勉強になったこと、ホルストの三管編成は楽器ごとの関連性が希薄なことについて土肥先生に質問したことがある。「ホルストは「惑星」で名が知られているだけだからね」と申された。でもイギリスが生んだ偉大な天才の一人だ。それはそうと、この課題をクリアして作曲した弦楽四重奏曲第1番は、土肥先生から指摘されたところが一つもなくして譜面をご覧になられただけで「これでよし」となった。私は自覚はないのだが弦楽作品の作曲が得意なのかも知れない。

⑤ヴァイオリン・ソナタ第1楽章(1977.1.16 第13回葵の会初演)＝スプリング・ソナタの受け売りだ。そうだろう。ここもそうだし、この部分もそうだ。

⑥シンメトリアーバイオリンとピアノのためのー(1977.10.14 第2回埼玉県新人演奏会オーディション合格作品)＝真ん中から逆進行する形式が面白い。タイトルを *Simmmetria* というイタリア語にしよう。

⑦ COLUMN ー弦楽四重奏のためのー(1977.10.14 全音楽譜出版社刊行)＝この作品は土肥先生には見せなかったかも知れない。当時楽式の研究に没頭していて、夜中に起き出して一心不乱に作曲した記憶はあるのだが、「回転するリズム」を土肥先生が何とおっしゃられたのか、どのような感想を持たれたかが記憶に残っていない。今思えば大変に残念なことだ。

この作品の着想は杉戸高校着任当時の独身時代まで遡る。東武動物公園駅が「杉戸駅」だった頃の駅前にスナック・バーがあった。そこで一人でタンブラーを見つめながら、上の方の大きな円と、下の方の小さな円をジッと見つめながら、この形を曲の形式に応用できないかを考えた。こうして思い当たったのが「回転するリズム」であり、S字曲線による形式だった。

この「回転リズム」とS字曲線による形式は、その後の作曲スタイルには応用されておらず、私の作品の中で特異な存在であるし、青年時代の作品の中では、作曲システム確立の過程で記念碑的存在でもある。

⑧シンメトリアⅡー打楽器とピアノのための断章ー(1980.10.8 日仏会館にて初演)＝何故四度和声にこだわるのか。三度が入っていても、使ってもいいじゃないか。善し悪しはともかくとして小菅君の根底にあるのはペンタトニックなのだ。

⑨オンドラツイオーネ「波動」ー2台のピアノによるー(1984.4.4 第20回葵の会初演)＝このころから私の作品に対してのアドバイスはあまりされなくなった。私の作風が確立したと感じられたのかも知れない。私の作曲活動に対する土肥先生の感想として、奥様がおっしゃられたことがある。「どんなにいい大学を出たって作曲活動をしないのではダメだ。作曲活動を続ける者が勝ちなのだ」と主人がいったわよ」。

⑩カンタータ「直実」土肥泰作曲ピアノ・スコア版(1996.3.26 第31回葵の会)＝直実は管弦楽作品で土肥先生の手によるピアノスコアがなかった。フルスコアとスケッチを土肥先生から渡されて、私が全曲ピアノスコアにした。先生の作曲法の全貌を知るいい機会となった。

⑪ 歌劇「なよたけ」全幕手書きピアノ・スコア完成製本(2000.5.31)＝土肥先生にお見せしたのは製本する前の手書きの直筆の譜面であった。序曲がない。間奏曲もない。レティタティーボもない。従来のオペラと比べて随分と趣が違う。現代のオペラはこういった方向なのかも知れないとおっしゃられた。私は後になって、PCスコアに書き直したときに序曲や間奏曲をオペラに書かれた音楽の中から取りだして付け加えた。

この他の私の作品に演奏会用ピアノ組曲「可憐なる小さき歌」(1989.9.10 音楽の友社刊行)がある。機能と和声による作品群であるが、土肥先生は、このような作品でも喜んで見て下さった。そして出版をアドバイスされて、出版記念祝賀会でご祝辞をいただいた。

葵の会

先にも述べたように入会は小高秀一君が誘ってくれたからである。そしてしばらくは小高君と梶山君のフルート伴奏をやりながら作品を発表した。作品発表では何と云っても中村恵子さんの協力が大きな支えとなった。景観、ピアノソナタ No.2、組曲「十二支」、オンドラツイオーネ「波動」、可憐なる小さき歌、「なよたけ」。私の初期の作品のほとんどを中村恵子さんが葵の会で弾いて下さったことが、私の作曲活動に大きく貢献している。ピアノの水野園子、瓜生尊子、山崎あさみ、伊藤久子、田中美雪の皆様と、歌って頂いた田中清恵、飯浦君代、橋本博之、大沢富子、大沢滋美の皆様に変更して感謝を申し上げたい。

(2)名取吾朗先生とグループ「蒼」

私が現代音楽作曲グループ「蒼」に入会したのは昭和 63 年 6 月である。シンメトリアⅢ－4本のクラリネットのための－(1988.7.8) 第7回蒼初演)に始まる。埼玉県立春日部高校勤務の時代に名取吾朗先生が吹奏楽コンクール審査員として見えたときに、私を弟子に加えてくださった。

名取先生が 70 歳でご逝去されて以後、第 23 回グループ「蒼」新作演奏会から代表になって「蒼」の主宰している。次の一文は第 23 回「蒼」プログラムに掲載した私の挨拶文である。

「蒼」の理念とご挨拶

現代音楽作曲家グループ「蒼」は作曲家名取吾朗氏(1921-1992)の理念である「エコールや師弟関係に一切とらわれず、個々が自らの芸術性に根ざした作品を追求する」のもとに 1982 年 7 月に創設されました。毎回、出品者の合意に基づいて楽器編成を特定し、新作書き下ろし演奏会を行うという独自の形式を取ってまいりましたが、おかげさまで今回第 23 回新作演奏会を迎えることができました。これまでに寄せられた皆様方のこれまでに寄せられた皆様方のご理解と心あたたまるご支援に心から御礼申し上げます。



名取吾朗先生(第7回蒼)

現代音楽は、未だ多様で混沌ととしています。20 から 21 世紀の現過程の中で、どのようなものが真正な音楽となってくるのか予測は困難であります。だからこそグループ「蒼」が社会に向けて新作書き下ろし演奏会を行い、作品を提示し続けることが大きな意義と価値を持っていると信じております。今回は楽器編成を弦楽器に特定し、重要文化財であります旧東京音楽学校奏楽堂を会場を移して開催するという新しい企画であります。二つの弦楽器によるアンサンブルから弦楽 5 重奏までの 5 つの新作を演奏いたします。旧東京音楽学校奏楽堂も古い建築物であります。「古きを尋ねて新しきを知る」という故事にならって今回、16 世紀イタリアで完成されたヴァイオリン属を使って、また日本が西洋音楽を取り入れた黎明期の建造物を会場として、われわれグループ「蒼」がどのようにかわり、現代音楽の新作書き下ろし演奏するのかを最後までご傾聴頂きました幸いに存じます。現代音楽作曲家グループ「蒼」。

グループ「蒼」新作初演作品

シンメトリアⅢ－4本のクラリネットのための－(1988.7.8 第7回蒼初演)、COLUMN－弦楽四重奏のための－(1979.8.8 第8回蒼初演全音楽譜出版社刊行)、オリジン・シンメトリア－2人の打楽器奏者とピアニストのための－(1990.7.5 第9回蒼初演)、ディメンション・スペース－弦楽四重奏のための－(1991.4.12 第10回蒼初演埼玉県音楽家協会オーディション合格作品)、VITA(生命)－ピアノ・ソロのための－(1992.7.9 第11回蒼初演)、「ディアログ」－フルートとピアノのための－(1993.7.8 第12回蒼初演)、ハーブシコード三章(1994.7.7 第13回蒼初演)、「投影」－弦楽四重奏のための－(1995.7.6 第14回蒼初演)、「響」－B♭クラリネットのための－(1996.7.11 第15回蒼初演)、「ネイチャー」－金管 5 重奏のための－(1997.7.7 第16回蒼初演)、「リフレッシュオーネ」－2人のチェリストのための－(1998.7.9 第17回蒼初演)、「会話」－アルトサクソフォンとピアノのための－(1999.7.9 第18回蒼初演)、ダブルベースとピアノのための会話－「翁」－(2000.7.6 第19回蒼初演)、投影Ⅱ－

弦楽合奏のためのー(2001.11.15 第 20 回蒼初演)、「シンメトリア」ーヴァイオリンとチェロのためのー(2002.10.10 第 21 回蒼初演)、「シンメトリア」ー木管 5 重奏のためのー(2004.12.10 第 22 回蒼初演)、「シンメトリア」ー弦楽 5 重奏のためのー(2005.12.7 第 23 回蒼初演)。

(3) 詩と音楽の会

詩と音楽の会は平井康三郎氏が創設された。名取先生が平井先生に私を直接紹介してくださった。

名取先生にお会いした頃は、オンドラツイオーネ「波動」ー2台のピアノによるーによって、ちょうど自分の作風が確立した時で、タイミングとしてはピッタリであったと言える。「あなたに会えて」が機能和声で作曲されていることから分かるように歌曲の作風は、まだできていなかった。その後「赫映を愛しはじめると」を四度和声で作曲し、歌曲「ひみつ」を経て、日本語のイントネーションを重視した四度 和声による歌曲の作風を確立することができた。



詩と音楽の会(H.19.9)

歌劇「なよたけ」の第三幕の竹取の翁のアリア「赫映を愛しはじめると」の前に、実は作曲ノートに記されたもう一つの「赫映を愛しはじめると」がある。これが私自身の四度和声による歌曲スタイルに移行する最初の歌曲である。黄金比作曲理論が着想の段階で、安定感のある転調法も確立されておらず、四度和声の終止形もない。まったくの手探りで作曲した作品だが、これを葵の会で発表できたから次の詩と音楽の会の「ひみつ」につながった。「ひみつ」も同じ状態で作曲した歌曲であるが簡潔で格段に進歩していて歌いやすい。

詩と音楽の会に入会して私の歌曲作曲スタイルができたからこそ、歌劇「なよたけ」作曲することができた。土肥泰先生によって作曲の何たるかを学び、名取吾朗先生によって作品を発表する場を与えて頂いたのである。

詩と音楽会初演作品

「あなたに会えて」山中茉莉作詞(1990.9.19 第 23 回詩と音楽の会音楽の友社刊行)、「ひみつ」鈴木盛子作詞(1992.9.24 第 25 回詩と音楽の会音楽の友社刊行)、「仮面」宮川澄子作詞(1994.9.29 第 25 回詩と音楽の会音楽の友社刊行)、「幻影」柴田忠夫作詞(1995.9.27 第 28 回詩と音楽の会音楽の友社刊行)、「さくら月宵」三枝ゆり子作詞(1998.5.27 第 31 回詩と音楽の会音楽の友社刊行)。

「手紙の伝説」山田賢二作詞(1999.10.1 第 32 回詩と音楽の会初演)、「柿の若葉に」浅田真知作詞(2000.7.31 第 33 回詩と音楽の会初演)、「枯れ草の春」印南長子詞(2001.9.27 第 34 回詩と音楽の会初演)、「青春レシピ」山中 茉莉作詞(2002.9.24 第 35 回詩と音楽の会初演)、「羽衣幻想」坂内のぶ子作詞(2003.9.26 第 36 回詩と音楽の会初演)、「水の上の空の上」印南長子詞(2005.9.21 第 38 回詩と音楽の会初演)。

(4) JFC 日本作曲家協議会

やはり名取先生のご推薦によって平成 3 年 6 月日本作曲家協議会に入会し、第 1 回 JFC アンデパンダンより歌劇「なよたけ」新作部分発表を続けて現在に至っている。JFC アンデパンダンの第 1 回は平成 8 年(1996.11.23) 旧奏楽堂で行われた。①二重唱「ねえ、文麻呂」、②「わたしをしっかりと守って」なよたけ…栗原愛子、文麻呂……浅水順一、ピアノ……高良仁美であった。以後継続して「なよたけ」を発表し続けて現在に至っている。

JFC 日本作曲家協議会初演作品

- ① 1996.11.23 第 1 回アンデパンダン 二重唱「ねえ、文麻呂」「わたしをしっかりと守って」
- ② 1998.12.4 第 3 回アンデパンダン第一幕より「どうぞ、おかけくださりまして」
- ③ 1999.11.16 第 4 回アンデパンダン第二幕より「そこを偶然このわたしが……」
- ④ 2000.12.5 第 5 回アンデパンダン第二幕より「おれが恋をしている？」
第三幕より「お爺さん！ぼくは都を捨てました！」
- ⑤ 2001.12.6 第 6 回アンデパンダン歌劇「なよたけ」第一幕「竹取の翁の家」改訂版初演
- ⑥ 2002.12.6 第 7 回アンデパンダン歌劇「なよたけ」第二幕「葵の祭・都大路に一廓」(前半)
- ⑦ 2003.12.4 第 8 回アンデパンダン歌劇「なよたけ」第二幕「葵の祭・都大路に一廓」(後半)
- ⑧ 2003.1.29 ピアノのための三章(神秘・歌・波)作曲、JFC 日本作曲家協議会刊行

- ⑨ 2005.1.11 第9回アンデパンダン歌劇「なよたけ」第三幕第1場「竹林の小さな空き地」
第2場「小高い丘陵・昇天」
- ⑩ 2006.1.7 第10回アンデパンダン歌劇「その妹」第一幕「広次の部屋」
- ⑪ 2007.9.6 第12回アンデパンダン歌劇「その妹」第二幕 第二場「広次の借家」

第2節 平成19(2007)年以後

教職生活とは大分縁遠くなった。教師生活が遠い昔に過ぎ去ったように感じられる今日この頃である。時々授業をやる夢を見る。教材研究がやってなかったりテスト問題が作ってなくて、さて、どうしようとい夢だ。現役時代にそのようなことは一度もなかったのに、今は退職しているのだから、教材研究をしていないので、このような夢を見るのかも知れない。

作曲活動と健康の維持だけが日課になった。日本医歯薬専門学校から埼玉福祉専門学校に移って、高校訪問をやりながら手帳に頭に浮かんだ事柄を書き付ける。例えば現代音楽とシンセサイザー、黄金分割による「統合8音音階の理論」、「能の現代歌劇化」についてである。こうして頭にひらめいた事柄を、冬になってから冷静に考えて成文化したり、精密な理論を打ち立てたりする。このような思考は忙しい学校生活の中では絶対にできないことであった。若い現役時代は、ほとぼしる思想や楽想を具現した時代であった。そこに書き表した文章や作品は、瑞々しい発想に溢れていた。67歳を過ぎた今になって、そのような文章や作品を書けと言われてもできるものではない。しかしじっくり考えて、周到な理論を打ち立てて、緻密な構成のもとに書いた文章や作品づくりは、若かりし頃には決してできない仕事である。



2004.6月頃

何となく、間もなく私は作曲家として大成するのではないかと感じられるようになった。2008.12.14(金)に開催した25周年記念グループ「蒼」新作演奏会が多大な成果を挙げたことが大きな原動力になったことは間違いない。このことが大きな自信になって、今後の私がどのような生き方をしていくべきかが見えてきた。まだ具体的にこのように生きようという確固とした心情ができあがったわけではないが、何をなすべきか作品の方向性が確実に生まれたように思われる。今考えている創作活動の具体的方向性は①現代音楽会への聴衆の動員、②日本の情感に基づく現代音楽の作曲である。この二つの基本的理念として活動していく。歌劇「なよたけ」や歌劇「その妹」は、その意味で方向性に合っていた。作品づくりを通じて私の方向性が見えてきて、そのことによって基本的理念として自覚できたといつてよい。こうして生まれた作品が黄金比に基づく今の作品群である。

平成19年以後の作品

- 2006.9.30 歌曲「白鷺と老人」第39回詩と音楽の会初演
- 2006.12.8 シンメトリア」－ Bn. Vc. Pfのための－第24回蒼初演
- 2007.1.25 「シチリアーナ」－ Vn.と Pf.のための－葵の会田中美雪さんの依頼により－
- 2007.3.20 「湯西川 平家の里の蟬時雨 河鹿蛙に瀬音も和して」
- 2007.4.14 童話「子守唄の知らせ」－ソプラノ・テノール・バリトン三重唱ために－
第43回葵の会初演
- 2007.6.24 歌劇「その妹」第二幕 第二場「広次の借家」埼音協第42回定期演奏会初演
- 2007.9.6 歌劇「その妹」第二幕 第二場「広次の借家」武者小路実篤原作 JFC アンデパンダン初演
- 2007.9.28 歌曲「鶏たちに花束を」第40回詩と音楽の会初演
- 2007.12.14 大和撫子の恋－ For Wind Quintet+Strig Quintet － 25周年記念グループ「蒼」初演
- 2008.4.19 YUYA－コンサートスタイルによる現代能歌劇－第一場「宗盛の館」第44回葵の会
- 2008.9.24 歌曲「天命の雉」第41回詩と音楽の会初演
- 2008.12.12 YUYA－コンサートスタイルによる現代能歌劇「熊野」－第二場「花見の宴」－
第26回グループ「蒼」初演

2009.4.2 現代能歌劇「松風」完成。2009.12.2 第27回グループ「蒼」新作演奏会初演の予定
2009.5.25 歌曲「ちいさな目に雪 雪」作曲。第42回詩と音楽の会初演の予定

兄弟姉妹と私の近況

兄弟も随分年をとった。一番上の姉賀子夫妻は、聞いている限りでは二人とも健康。長兄章雄夫妻は奥方は健康だが、長兄の章雄は食道癌で入院手術、2008年5月に脳梗塞で入院、左半身不自由になった。もう絵は描けないだろう。二番目の姉旭代夫妻は、夫富司は歯肉癌で死去、姉旭代は若い頃の胃潰瘍手術が原因の肝炎進行による癌で手術を繰り返している。弟久雄夫妻は、奥方は乳癌手術をしたが今は平穏無事、弟久雄は昨年(2007.12)直腸癌手術をしたが数日で退院した。

父武雄が肝臓癌で死去した頃は、癌は不治の病だった。現在は兄弟に見る限り不治の病ではなくなったようだが、兄弟のほとんどが癌にやられている。



2008.12.12 現代能歌劇「熊野」